

2019 年度・総合研究所研究チーム活動（最終）報告書

研究代表者 国際言語文化センター・教授・トーマス・M・マック

① 研究課題 文化の継承と日本語教育

② 研究期間 2018 年度～2019 年度

③ 研究メンバー

佐藤泰弘 文学部・歴史文化学科・教授

廣川晶輝 文学部・日本語日本文学科・教授

谷守正寛 国際言語文化センター・准教授

森川結花 国際交流センター・日本語特任講師

唐津麻理子 米国アリゾナ大学・東アジア研究科・准教授

永須実香 上智大学・言語教育研究センター・嘱託講師

青木利江 米国フィンドレー大学・言語文化学部・講師

スティーブン・D・ラフト 米国ピッツバーグ大学・人文学部・講師

④ 研究成果および実績の概要

本研究チームは、日本国内／日本国外における日本語教授者／日本語学習者の観点から多角的に日本語教育における日本文化の教授・受容の方法と効果について調査、分析をし、結果を考察しようとするものである。

日本国内では森川・永須が観世流能楽師・上田宜照氏、藪内流茶道家・福田竹弍氏とコラボレーションを組み、両氏を講師として、2018 年度に行った日本語教師向けワークショップに引き続き、2019 年度は「日本語学習者と日本語教師のためのワークショップ」を能楽／茶道各 1 回ずつ開催し、アンケート調査、インタビュー調査を行った。また、2019 年 2 月に YiJ プログラムにおける日本語授業の一環として留学生を対象とした能楽ワークショップを行い、講師役の文化の担い手（能楽師・寺澤拓海氏）、日本語学習者、そして日本語教師という 3 者間の関係における日本語教師の役割について考察し、その成果を CAJLE2019 大会にて報告した。

また、谷守は、「文化の継承と日本語教育」に係る資料として、日本語教育における日本文化の教育に関連する資料を検討・収集し、日本語教育における文化に関わる教育のあり方を考察している。

マックは、在日外国人に対するインタビュー調査に基づいた質的研究をおこなっている。これは優れた日本語学習法を見出した日本語非母語話者を対象にしたもので、彼らにとって文化的なイメージ環境が上級レベルの日本語スキル獲得にどのように影響を及ぼしたかを調査しているものである。特に、その学習者自身が、文化的な刺激が果たした役割をどのように認識しているか、その見識を採取し、日本語学習プログラムに組み入れるべき文化的な内容について検討している。

また、関連分野研究としての日本史研究の立場から、佐藤は「京都御所」をそのスポットとして取り上げ、現在の京都御苑完成に至るまでの歴史的な経過、京都御所の位置の変遷、建造物の変遷等、時間空間の枠を大きく広げてダイナミックな観点から「都」と「御所」を見るフィールドワークの可能性を検討した。

もう一つの関連分野研究である日本古典文学研究の立場から、廣川も地元の歴史的スポット処女塚古墳をめぐる「菟原娘子伝説」に注目し、古くは万葉集から大和物語、観阿弥作の謡曲「求塚」、森鷗外の戯曲「生田川」に至るまでの変遷を追い、古典文学に現れた男女、親子の人間関係と心理、死生観、恋愛観への共感がグローバル人材の成長にも豊かな刺激を与えることを見出した。

日本国外では、米国アリゾナ州において唐津が2018～2019年度の2年間にわたって大学の日本語プログラム内の活動として、文化体験イベント（茶道、おにぎり作り、日本人英語落語グループとの交流会など）を開催し、学習者を対象に日本語学習・日本関連科目の学習の動機付けとの関連を調査した。それとともに、地域コミュニティにおける日本文化発信拠点の代表者への調査、また日本関連分野（宗教、歴史）の専門家への調査を行い、日本語学習と地域コミュニティや専門分野との連携の可能性について検討している。

同じく、米国オハイオ州において青木もさまざまな日本文化体験活動イベント（書道、折り紙、日本料理等）を学内外において行っているが、これらの活動に日本人交換留学生との交流も組み合わせ、異なる言語・文化的背景を持つ人とのコミュニケーションの楽しさ・難しさを体験させる機会としている。在外邦人の日本文化発信にける思いと日本語学習者の受け止め方も対象として調査を続けている。

ラフトは、アメリカ人留学生が日本留学中に経験する異文化間摩擦の原因を明らかにするため、日本語の謝罪、感謝、賛辞、からかいといった語用論的文脈においてなされる発話行為の日米間の違いについて先行文献を調査をしている。また、実際に留学生が日本語母語話者との交流の中で経験した異文化摩擦の発生状況を採取し、それらのパターンとテーマを分析し特定化することで異文化摩擦発生についての合理的な解釈を得、それをもとに、日本人の行動様式からその意図を読み解く学習者向けの教育方法を開発することを目指している。(1667字)

⑤ 研究発表

- ・研究費を使用して開催した国際研究集会

なし

- ・本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

- i) 廣川晶輝(2018)「天平万葉と宴」2018年度大韓民国中央大學校日本研究所學術大會, 於大韓民国中央大學校大學院国際会議室, 2018年12月, 大韓民国中央大學校日本研究所主催
- ii) 廣川晶輝(2019)「親と子の別れ—山上憶良の作品を中心に—」2019年度中央大學校日本研究所国際學術大會 An expression of sadness in East Asian culture, 於大韓民国中央大學校, 2019年12月, 大韓民国中央大學校日本研究所・同大学院日語日文学科主催
- iii) 森川結花・永須実香(2019)「日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割」CAJLE2019年次大会, 於カナダ・ブリティッシュコロンビア州ビクトリア大学, 2019年8月, カナダ日本語教育振興会主催

⑥ 研究成果による産業財産権の出願・取得状況

なし

⑦ 研究成果の公開方法（研究叢書の公刊、学術雑誌投稿など）

- i) 廣川晶輝(2018) 「笠金村『養老七年吉野行幸歌』について」『美夫君志』MIFUKUSHI, 97号, pp28~41, 美夫君志会
- ii) 廣川晶輝(2019a) 「山部赤人『不尽山を望む歌』について」『甲南大學紀要 文学編』THE JOURNAL OF KONAN UNIVERSITY Faculty of Letters, 169号, pp1-10, 甲南大学
- iii) 廣川晶輝(2019b), 「山上憶良の天平元年七夕長歌作品について」“On Yamanoue no Okura’s First Year of Tenpyō Tanabata Chōka Sequence.”, 『上代文学』JODAI BUNGAKU (Early Japanese Literature), 122号, pp. 1-14, 上代文学会
- iv) 廣川晶輝(2019c), 「中国故事受容と和歌表現」上代文学会叢書『万葉をヨム 方法論の今とこれから』 pp. 31-45, 笠間書院
- v) 森川結花 (2019) 「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」『甲南大学教育学習支援センター紀要』, 第4号, pp. 53-64, 甲南大学教育学習支援センター
- vi) 森川結花・永須実香 (2019) 「日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割」“CAJLE2019 Proceedings” pp. 176-185, カナダ日本語教育振興会
- vii) 森川結花 (2020) 「日本文化体験学習にかかわる教師の認識」『甲南大学教育学習支援センター紀要』 第5号, pp. 37-51, 甲南大学教育学習支援センター